

2021年ASK?映像祭総評

木邑芳幸

2020年に続き2021年もコロナ禍での映像祭となった。密を避ける為プログラム上映は避け、入退出自由のループ上映となる。緊張感は薄れてしまうかも知れないが、無料で気軽に見られる良さも有るので、あまり時間の無い方もお寄り頂ければ幸いである。今年の応募に関してであるが、応募数は予測に反して大幅に増え40点で有った。比較的、在宅時間が増えて創作の機会も増えたのであろうか。

全体の傾向としては、アニメーションが多数では有ったが、実写も10点程度有り、バリエーションは増えている。機材等、制作環境全体のレベルも上がり作品のクオリティーも高いものが多かったが、魅力的作品となると、入選以上の16作品に絞られた印象であった。

大賞は副島しのぶの「Blink in the Desert」であった、砂漠に暮らす象と少年の話で、少年が何気なく羽虫を殺してしまい、以後羽虫を殺した罪の意識に苛まれる、羽虫を開放した事で少年も救われる話である。人形を使ったストップモーション作品であるが、人形や背景の作り込みが卓越したレベルであり、正に少年の霊に触れる思いがした。初見ではストーリーとしてはそんなに響かなかったのであるが、環境問題を含め、世間のニュースを見るたびに無意識に殺生をしてしまった少年の姿が我々にも重なって見えてくる。深く心に響く作品であった。

久里洋二賞は工藤雅の「差異と反復とコーヒー」であった。ある音楽喫茶で回るレコードと回転する喫茶店の光景、タバコをふかす男、心地良い揺らぎに魅了される作品であった。「差異と反復」はフランス現代哲学の難解な書であるが。作品のテイストとも合っている、コーヒーと併せたセンスが光る。

西村智弘賞は松岡美乃梨の「Destiny」であった。テーブルの上の日用品を工夫して作品に仕上げているが、アイテムごとの特徴を活かした役作りが匠であった。コロナ禍で外出できないなか、創作の可能性を見せてくれる秀作であった。

ASK?賞は永迫志乃の「Body Obsession」であった。主役のカエルは卵に生まれオタマジャクシを経て変態し、カエルとなる。作品を直訳すると肉体の妄想であるが、作品はカエルが肉体を変幻自在に変えていく様子をグロテスク且つユーモラスに描いている。肉体が刻まれる表現などあるのだが、構図と色彩のポップさが残酷さを感じさせず、独特の美学を構築している。

その他入選では、橋本誠史が3点入選した。どの作品も単純な線と語りで成立しているが、稚拙なようで巧みな作品であった。突拍子もないシーンの連続で久々ナンセンスの醍醐味を堪能させて頂いた。

岡田詩歌の「Journey to the 母性の目覚め」は14歳の女の子の母性へのプロセスを描い

た作品であるが、重い題材をユーモラスに描いている。Callico&の「focus」は、コロナ禍の世界を音と映像で表現した作品であるが、モノトーンで詩的な映像が印象に残った。

小島こころの「7才の夏」は子供の頃の一寸怖い記憶が良く描かれている。中村匠吾の「IMAGE TOY」は、動く玩具のイメージという映像への新しいアプローチが新鮮である、エリックサティが家具の音楽を提案したが、家具の映像というところか、

GUAN HANの「隅 すみ」は内的世界をアニメーションと囁きで構成した哲学的な作品であった。隅というタイトルが壮大な世界への橋渡しとなっている。

治田ひかるの「百花のよそおい」はファッションの遍歴をカラフルに描いた作品であった。

女性からエネルギーを貰え、元気になる作品でした。

園田健二の「PROCYON ロボット掃除機に心が宿るとき」は話題のAIと人間との触れ合いだが、掃除ロボットのキャラクターの描き方が秀でていた。

森陽平の「The shape of」は極めて実験的な作品で、ノイズの中にイメージが生成されていくプロセスに立ち会えるスリリングな体験をもたらす。

高谷智子の「復元不能の都市」写真素材を複合的に構成し、フォーカス操作と時を刻む音が効果的に追憶の世界を演出している。感傷的にならずにクールに都市の風景を描いていることが好ましい。

。